



Title	日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大山, 隆子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13401号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/74492">http://hdl.handle.net/2115/74492</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takako_Ohyama_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 大 山 隆 子

## 学位論文題名

日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能

### 本論文の観点と方法

本論文は、話しことばの日本語で頻用される「言いさし」現象について、統語論・語用論の観点を中心に、関連する現象を広範に捉え、多角的に考察した先端的研究である。言いさしは、文が完結しないままの形式のものを広く指すが、日本語では従属節で切れて主節が現れないタイプのものが慣習化しており、多用されている。本論文では、この種の現象を従属節末に現れる「し」や「たり」や「から」「ので」などの接続助詞から、その統語構造論と語用論的な特質や談話機能について分析を加えている。本論文は10章で構成され、基礎概念となる複文や従属節などの検証と定義を行った上で、言いさしに関する記述文法や認知文法、また、通言語学的な先行研究に検討を加えて、主節が表層に出ず、従属節が主節化すると捉える非従属化を基盤として枠組みを定めている。右方部主要型の日本語の場合は、従来の非従属化で想定する主節の省略だけではなく、節に従属節標識としての接続助詞を付加するものも想定すべきとし、2種類の非従属化を設定するところから分析を始める。また、社会語用論・対人語用論の知見を分析に適用するために、ポライトネス理論をはじめとする分析概念も広く扱い、形態論・統語論を含む形式と構造の面、意味論・語用論を中心とする機能の面を2つの主軸として、日本語の特性に迫る分析にまで精度を高めている。

### 本論文の内容

日本語の場合、節と句は形態論的には連続相をなしていることから、連用形についての扱いを決めることが重要である。通常連用形も連用形に接続助詞「て」を伴う連用て形も同様にテンスを独自に持ち得ない点では共通しているが、動詞の複合形成では語彙的複合や統語的複合にも広く用いられる連用形に対して、アスペクトなどが慣習化した用法が中心となる連用て形といった違いがあることを第3章で確認している。「食べたり」の「たり」も連用て形と同じように、テンス分化がない点を共通点として捉え、「食べるし」の「し」といった接続助詞はテンス分化を持ち、節そのものが主節相当になることから、付加型の非従属化と捉えられることを主張している。

第4章と第5章では、従来並列の接続助詞とされた「し」について通時的視点・地理的分布を含む共時的記述などを踏まえて細かな分析を加えている。先行研究でこれまで理由を表すことがあったとした指摘は、「し」固有の意味機能ではなく、先行する従属節の表す事態と後続の主節で述べられる事態との前後関係が因果関係に語用論的に投影される解釈に過ぎないことを指摘しており、重要な語用論的成果である。また、文階層や節階層に関する先駆的な枠組みである南文法を援用して、「し」が導く節のカテゴリーを判断している。「し」が導く並列節は連言的に命題内容を重ねて提示することを本来の機能とするものの、そこから逸脱する場合があります。後続の主節と連言関係をなさないものが見られることも報告している。「し」で終わる言いさしの場合は、本来の連言性を潜在化させて、言語化しない他の命題も提示できる準備があるという話者の伝達態度を推意として示すことで、自説に固執しつつ対立姿勢を保持するスタイルを形成できると主張する。

第6章では、同様に言いさしに多用される「たり」を取り上げ、その基本機能を選言性と措定しながら、南文法におけるたり節のカテゴリーと制約、成立にかかる通時的変遷などを論じている。そこでは「たり」の選言性は常に成立するわけではなく、逸脱して選言関係をなさない場合もあることを確認しながら、近年、その選言性を潜在化させて選択関係を示さない「～したりする」（本論

文ではこれを非選言形式と呼ぶ)がある種の後景化の機能を持つことを論じている。さらに、この種の用法がネガティブポライトネスの効果を発揮することから、聞き手との距離をとりながら発話する口語体で多用されることを明快に示し、形式上の非選言用法を用いて「たり」の選言機能の残像効果を社会語用論的に利用した結果であると主張している。

第7章では「から」や「ので」など因果関係を示す接続助詞を用いて言いさす発話形式について論じている。「から」は先行研究で理由を表さない用法の指摘があることからその点を含めて談話効果を確認し、「ので」は複合助詞形成による構文化とそれに伴う推意形成について指摘している点は重要な成果である。「し」による言いさし文の「し」の位置に出現できる「から」「ので」はいわばパラディグマティックな関係を形成していると言えるが、それぞれの語用論的機能が異なることを形態論的な接続制約も確認した上でまとめている。

第8章では引用形式とされる「って」を中心に間接証拠性、いわゆる伝聞の用法を、「と」なども含めて、「し」との比較も行いつつ論じている。引用辞としての「と」と「って」は発言動詞・思考動詞に対する補文を導く場合にはかなり近い機能を有するが、言いさしによって間接証拠性の表現をつくれるのは専ら「って」であり、「と」は問い返しなどを除けば、並列提示する補文などでしか用いない。この種の差異はこれまでも記述されているが、言いさしと形成の観点からの本格的な分析は他にほとんど見られない。しかもこの章では、「って」は間接証拠性を表さない言いさしも多く、それは、聞き手が文脈上受容可能な条件が整っているのに適切に受容していない状況で、その点を非難しながら伝達するメタ語用論的な機能を有することを主張している。これは、ネオグライス語用論から対人語用論へと越境する重要な指摘とみることができる。結果的に、話者が聞き手との見解対立や認識の相違などがある場合に、「って」と「し」がパラディグマティックな関係をなすこともあわせて指摘している。

第9章では、節末に頻出する「よ」「ね」と「し」の比較を行うにあたって、従来終助詞あるいは文末詞とされるものが、節の境界や句の境界に現れる状況について確認している。節末・句末に出現するものは、間投助詞などに分類されることもあるが、文体差の形成の観点から見ると、終助詞と間投助詞の「ね」に連続性があっても、「よ」は終助詞と間投助詞を機能的に離散的なものとするべきことなどがわかる。「し」による言いさしも話しことばにおける現象であるが、終助詞・間投助詞類も話しことばやその種のジャンルで用いられる点で共通している。主節末に現れる「よ」「ね」は終助詞で文の完結性を左右しないが、主節に「し」などの接続助詞を付すことは完結性を奪う機能を持つことから、当初の枠組みで確認した付加型の非従属化と見ることができる。一方、従属節における「し」の位置には「ね」などが現れうるので、一見パラディグマティックな関係をなすように見えるが、「し」のあとにこれらの伝達モダリティ助詞が出現できることから、形態論的な分布も踏まえて、機能を比較している。

第10章では、前章までの個々の主張や結論を振り返って、全体の結論としてまとめ直し、十分に取り上げたり、深く掘り下げて分析したりできなかったことについて今後の課題として記している。